旅

一、二、丙　武下一郎

汽船宿窓をひらけば沖つべに逆まく浪の眞白きが見ゆ

船出でしあとの港の淋しさに獨り殘りて海を眺むる

窓さきに枝もたわゝと夏密柑實をつけたるが夕陽にあかく。（以上春）

浦の子は懐しき哉共に泳ぐ我を先生かと話して居たり

浪しづか浦のあなたを眺めつゝ今宵の泊りの町をおもひぬ

宿驛の書は眞淋し箱馬車の淺黄のとばり重くたれたり

さわ〳〵と鷄鳴くきこゆ朝霧の森のあなたに人家あるらし（以上夏）

潮鳴

二、三、甲一　莊島秩男

ほのぐらき連絡船のかたすみに潮なりをきく夜をあさみかも

港街ゆふべほのかに霧こめて汽笛さびしく空をながるゝ

かもめとぶ馬關の海はやゝあれてゆきこふ船に風さむみかも

雜

一、二、丙　本田保章

夕暮の稻葉の河の瀨を高み逝きにし人を思へば詮なし（友の死を悼みて）

嵐する空に響きぬ入相の鐘は消ぬがにかすかなれども

温かき夜具にうもれて今宵また父母の惠を新にぞする